

～★★市民参加のイベントを実施しました★★～

より多くの方に事業効果を知っていただくために、幌呂地区では再生地の見学会やヨシ苗の移植、達古武湖では自然再生の取組について住民説明会・意見交換会を開催しています。

地域の方々との連携（幌呂地区）

●令和4年7月に地域の方々と幌呂地区の見学を行いました。当日は14名の方々が参加し、湿原再生の現場を見学したり、ヨシの苗の移植などを行いました。



ヨシの苗移植の様子



湿原再生現場の見学

地域の方々との連携（達古武地区）

●今年度は釧路町公民館達古武会館にて、達古武湖自然再生事業の取組内容について地域住民への説明会・意見交換会を開催しました。



●北海道開発局 釧路開発建設部 治水課
〒085-8639 釧路市幸町10丁目3番地 釧路地方合同庁舎7階
Tel：0154-24-7250

詳しくはこちら →



●環境省 北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所
〒085-8639 釧路市幸町10丁目3番地 釧路地方合同庁舎4階
Tel：0154-32-7500

釧路湿原自然再生協議会 湿原再生小委員会

国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部 治水課
環境省 北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所

議事録や会議資料などは
こちらをご覧ください。



第25回 湿原再生小委員会【出席者名簿（敬称略、五十音順）】

個人【12名】

伊藤 毅 [上智大学]
加藤 ゆき恵 [釧路市立博物館]
神田 房行 [北方環境研究所 所長（元北海道教育大学副学長）]
黒田 寛
坂井 一浩 [八千代エンジニアリング株式会社北海道営業所]
清水 信彦
新庄 久志
照井 滋晴 [特定非営利活動法人 環境把握推進ネットワーク-PEG 代表]
根岸 淳二郎 [北海道大学大学院地球環境科学研究院 準教授]
針生 勤
矢部 和夫 [札幌市立大学 教授]
吉中 厚裕 [酪農学園大学 環境共生学類 国際理解学研究室 教授]

団体【3団体/3名】

釧路国際ウェットランドセンター [元岡 直子]
釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会 [芳賀 考朋]
釧路湿原国立公園連絡協議会 [元岡 直子]

関係行政機関【5機関/5名】

国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部 [菅野 法之]
環境省 釧路自然環境事務所 [柳川 智己]
釧路町 [高橋 愛梨]
鶴居村 [小玉 聖亜斗]

資料の公開方法

委員会で使用した資料および議事要旨は、釧路湿原自然再生協議会ホームページにて公開しています。

<http://www.hkd.mlit.go.jp/ks/tisui/qgmend0000003ppq.html>

ご意見募集

釧路湿原自然再生協議会運営事務局では皆様のご意見を募集しています。
電話・FAX にて事務局までご連絡ください。



釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

TEL(0154)23-1353
FAX(0154)24-6839

釧路湿原 自然再生協議会

湿原再生小委員会

ニュースレター

No.25

編集・発行：釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

発行日：令和5年3月31日

令和5年2月15日(水)「第25回 湿原再生小委員会」が釧路地方合同庁舎の共通会議室で開催されました。

開催概要

小委員会には、20名（個人12名、3団体3名、関係行政機関5機関5名）が出席しました。

今回は、「幌呂地区湿原再生事業について」、「達古武湖自然再生事業について」、事務局より報告があり、それぞれに対する意見交換が行われました。

湿原再生小委員会とは



湿原再生小委員会は、釧路湿原自然再生協議会の7つある小委員会の一つです。毎年1～2回の会議を開催し、湿原生態系と希少野生生物生息環境の保全・再生に関わる以下のような施策について検討をしています。

- ・地盤切り下げなどによる湿原再生
- ・達古武湖の湖沼環境の再生
- ・急拡大したハンノキ林の取扱いの検討



湿原再生の取り組み



釧路川とその流域

幌呂地区（鶴居村）



- ・幌呂地区では、湿原植生の回復を図るため、計画的に地盤の切り下げ、未利用排水路の埋戻しを実施して、地表面が地下水位に近づくことで湿原植生の回復を図っています。
- ・現在は事業を進めながらモニタリング調査を実施しています。

達古武地区（釧路町）



- ・達古武湖では、「繁茂したヒシによる水生植物への影響」や、「富栄養化の原因となる栄養塩類の流入量」を減らすことで生育環境を改善し、水草をはじめ多様な動植物がバランス良く生育している湖の再生を目指しています。

広里地区（釧路市、釧路町）



- ・広里地区では、急拡大したハンノキ林の要因解明と、未利用地となった農地を1960年代以前の湿原の姿へ再生するための手法について検討しています。
- ・現在は検討を終了し、過去に急拡大したハンノキ林の経過を観察するモニタリングを継続しています。

（次ページへ続く）

1 幌呂地区湿原再生事業について

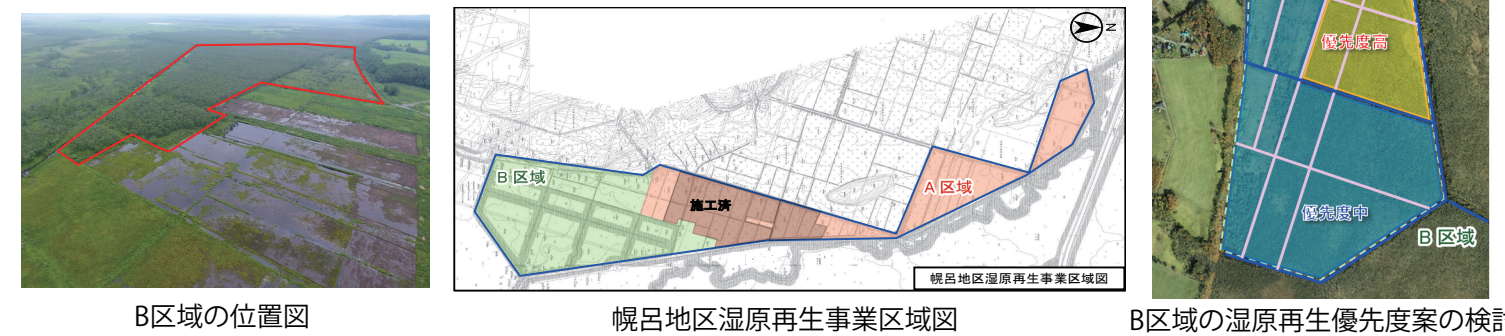
◆ 令和4年度の取り組み

地盤切り下げ・未利用排水路埋め戻し箇所のモニタリング結果

- 事業実施箇所の地下水位は概ね地盤高付近で推移しており、湿原植生も経年的に増加しています。
- 次年度は事業実施箇所での植物調査を実施し、湿原植生の回復面積を確認して現時点での事業効果を把握します。

B区域の湿原再生について

- 未利用排水路のせきとめ実施によりハンノキの生長抑制を目標としているB区域について、湿原植生回復の可能性、施工後の水位上昇量などの観点から優先度案について検討し、今後のモニタリング計画案を検討しました。
- 次年度に現地確認等を行い、B区域の実施に向けた準備を進めていく予定です。



このような意見交換が行われました。

委員

B区域の目標は昭和22年頃のヨシ・スゲが生育している環境を想定しているのでしょうか。

事務局

元々ハンノキ林だった箇所を戻すのは難しいので、当面実施する箇所についてはヨシ・スゲを目指したいと考えています。

委員

ハンノキ林だった箇所は水位上昇で林床植生が変わり、湿地林としてのハンノキ林と評価されるため、そのような捉え方で考えると良いと思います。

事務局

まずはせき上げによる効果をモニタリングした上で、環状剥皮を実施するか検討します。

委員

茅沼地区で実施している環状剥皮は、水位が高い箇所で効果が出ているので、B区域でも排水路のせき上げとあわせて行っているのでしょうか。

事務局

幌呂地区は農地と湿原の緩衝帯としての機能も期待しており、地域参加で実施しているヨシ移植は、緩衝帯の再生を目指した取組という理解です。

委員

幌呂地区の目標は湿原植生群落の再生でしょうか。ヨシは湿原植生ではなく水生植物なので、湿原本来の優占種はスゲ類にであることを理解していただきたいです。

事務局

緩衝帯としての位置づけ・取組であることを理解しました。ヨシは水質改善にも有効です。ヨシ移植の際は、緩衝帯として群落を創出しているということが分かる名称で市民に伝えていただきたいです。

委員長

委員

事務局

2 環境省釧路自然環境事務所が取り組みました

◆ 令和4年度の取り組み

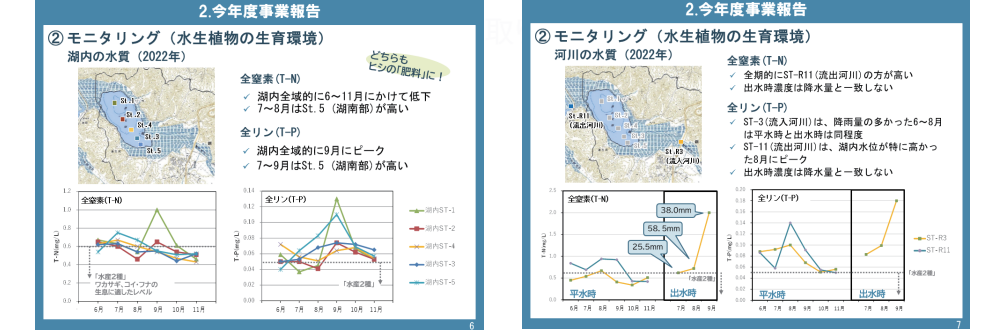
達古武湖のモニタリング結果

- 令和4年度は、達古武湖の水面を覆っているヒシの刈り取り（手刈り、ワイヤー刈り）や湖の水質、水位等の調査を継続して行いました。
- これまでの成果から手刈りでは少なくとも2年、ワイヤー刈りでは3年継続することでヒシの制御効果が確認されました。



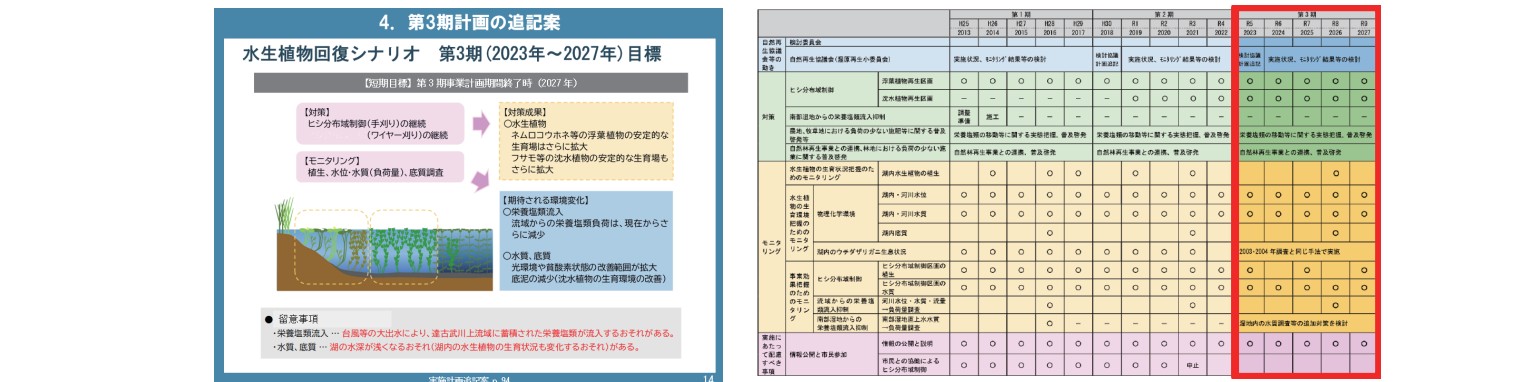
ヒシ刈り(上:手刈り、下:ワイヤー刈り)

- 湖の水質は、全窒素が湖内全域的に6～11月にかけて低下し、7～8月にかけて湖の南部で高い傾向が見られました。
- 全リンは湖内全域的に9月にピークとなり、7～9月は湖の南部で高い傾向が見られました。



達古武湖自然再生事業計画(追記)について

- 達古武湖自然再生事業実施計画について、2023年度以降のモニタリング計画を更新した追記案を作成しました。



達古武湖自然再生事業実施計画の追記案

このような意見交換が行われました。

委員

水質調査の数値について、高いか低いかの判断が出来ません。他の周辺湖沼など比較するデータがあったほうが評価しやすいのでは。

事務局

2007年のシラルトロ湖では全窒素が0.3～4.7mg/L、全リンが0.1～1.0mg/Lであり、いずれも達古武湖より高い数値が出ていました。

委員

負荷量を求める際には、流量も計測しているのでしょうか。また、栄養塩について流入量、流出量、内部生産も整理してほしいです。

事務局

流量は水位連続観測結果をもとに、水位と流量の関係から換算して算出しています。

委員

観測結果と社会的な要因を関連付けて説明してほしいです。

事務局

土地利用割合等を掲載しており、ST9・10はササ草地等が多く、STR1・2はカラマツの植林地が多いです。

委員

水質に囚われすぎると事業も目標が見えづらくなります。達古武湖のヒシをどう位置づけてどのような対策をしていくか、議論したほうが良いのでは。

事務局

これまでの事業結果を踏まえ、実施計画の追記案では「ヒシの制御を継続的に行うとともに、ヒシを含めた水生生物の多様性の回復」を目標に掲げています。

委員長

委員

事務局

2 環境省釧路自然環境事務所が取り組みました

◆ 令和4年度の取り組み

達古武湖のモニタリング結果

- 令和4年度は、達古武湖の水面を覆っているヒシの刈り取り（手刈り、ワイヤー刈り）や湖の水質、水位等の調査を継続して行いました。
- これまでの成果から手刈りでは少なくとも2年、ワイヤー刈りでは3年継続することでヒシの制御効果が確認されました。



ヒシ刈り(上:手刈り、下:ワイヤー刈り)

「幌呂地区湿原再生実施計画」の概要（平成24年5月）

幌呂地区周辺では、1970年代から湿原を農地として活用するために、幌呂川の切り替え工事や排水路の整備が行われました。その結果、地下水位の低下や冠水頻度が減少により、周辺の湿原が乾燥化し、植生が変化しています。

幌呂地区では、未利用農地の地盤切り下げ、未利用排水路の埋め戻しを行い、地下水位を地表面に近づけて、湿生環境の復元を図ります。

くわしくはこちら「幌呂地区湿原再生実施計画」

「達古武湖自然再生実施計画」の概要（平成25年2月）

達古武湖には、かつて多様な水生植物が生育していましたが、周辺環境の変化により湖の水質が変化し、アオコやヒシが繁茂して生物の多様性が損なわれています。

繁茂したヒシを除去したり、湖に流入するリンや窒素などを抑えることで環境の改善に取り組んでいます。

くわしくはこちら「達古武湖自然再生事業実施計画」